父の人生思い

岡山・吉備中央 高杉さん献花

何度も、何度も頭を下げた。6日、広島市の平和記念公園で営まれた平和記念式典で、岡山県吉備中央町北の高杉典子さん(64)が茨城県の男性とともに全国の被爆者遺族を代表し、原爆慰霊碑に献花した。生き残った罪悪感と発病への不安を抱き続けた父・正さんの人生に思いをはせながら、犠牲者の冥福を祈った。

「命ある限り、人のために尽くす」。昨年末、89歳で亡くなった正さんは生涯その信念を貫いた。農業の傍ら、町議やPTA会長などを務め、地域の相談に進んで乗った。

原動力は〝あの日〟の「贖罪(しょくざい)」。ちょうど70年前、爆心地からわずか約1キロの陸軍宿舎で被爆。炊事当番のため、遅い朝食中にごう音が鳴り、仲の良かった同僚2人と机の下に隠れた。結果的に2人は亡くなり、挟まれた形の正さんだけが生き残った。

エネルギッシュな活動の半面、若いころから病弱で鼻血をよく出した。体調を崩すたび、悔しさと不安の入り交じった表情で「原爆のせいじゃ」とつぶやく父の姿が、典子さんには忘れられない。

花を手に原爆慰霊碑に向かう高杉さん(右)

心身に大きな傷を残した原爆について、詳しいことを話したがらなかった正さん。典子さんの長女が小学生のころ、一度だけ当時の惨状を語り「わしは誰が憎いんでもない。ただ、原爆が憎いんじゃ」と声を震わせたという。

戦後70年の節目。初参加の式典で大役を務めた典子さんは「平和は当たり前にあるものじゃない。常に努力が必要。父が安心できるよう私たちが思いを引き継ぎ、頑張らないと」と目頭を押さえた。

(大橋洋平)

2015年8月7日 山陽新聞朝刊 32ページ
(C)山陽新聞社　無断複製・転載を禁じます。